

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 松尾 秀哉 (まつお ひでや)

論文題目 多極共存型民主主義の終焉
—1960年代のベルギーの列柱と政治的エリート—

松尾秀哉氏の「多極共存型民主主義の終焉」は、1958年のいわゆる「学校危機」から始まり 60年代になって本格化したベルギー政党政治の不安定化を、主として政治リーダーたちの行動を焦点において、ワロン（フランス）語とフラマン（オランダ）語による議会や閣僚会議などの議事録、政党の党大会議事録やパンフレット、さらにリーダーの自叙伝やインタビューといった一次資料と、リーダーたちに関する伝記研究などの重要な二次資料とを検討し、それに加えて英語の文献も参照しながら、実証的に分析した政治史研究の労作である。

提出論文の構成および要旨は次のようになっている。第1章「問題の所在とアプローチ」においては、レイプハルトが提起した「多極共存型デモクラシー」理論とベルギー政治史を簡潔に紹介した後に、60年代に安定を喪失していったベルギー政治に関する先行研究をその論点に従って整理している。著者によれば先行研究は、エスニシティ論、社会・経済的格差論、言語問題に力点を置く社会的クリーヴィッジ（分裂・亀裂）論、さらには、複数の社会的クリーヴィッジが作用して形成された「列柱（組織）」の弛緩を強調する「多極共存型」論に分類できるが、それらは共通して政治構造の変動が不安定をもたらしたという議論であり、レイプハルトが強調した「エリート間の協調行動」を軽視しているという。ここで著者はもう一度、「多極共存型デモクラシー」理論を検討して、従来の研究ではエリートの行動の分析が不十分であったと結論づける。著者の言葉を借りれば、「構造よりも主体」こそが重要だというわけである。つづく第2章「ベルギー政治の概要」では、あとに続く詳細な政治史分析の導入部として、多くの読者にはなじみのないベルギー政治の特徴が簡潔にまとめられている。

第3章から第6章までは、ベルギー政治で中心的役割を果たしてきたカトリック政党（CVP/PSC）を中心にしながら、それを代表する政治的リーダーたちと他政党のリーダ

一たちとの間で、主として政府内で政権形成や政策形成のためにとられる協調的行動が、みずからの党における「党内集団のリーダーたちとの関係（＝列柱の動態）」に及ぼす影響に力点を置いて、60年代にベルギー政治が安定を失っていった理由を分析している。

第3章「相対的安定期Ⅰ」では、1958年の第2次エイスケンス（CVP/PSC）単独少数党政権の成立から、教権主義と反教権主義の対立を招いた「学校問題」を解決するために、彼が歴史的伝統を破って自由党と連立して第2次連立政権を作るまでの意図や行動が分析されている。つづく第4章「相対的安定期Ⅱ」では、第3次エイスケンス連立政権において、彼が従来の協調的行動の枠を超えて自由党に譲歩したので、次第にカトリック政党が不安定化していく過程が分析され、政府財政の赤字増大に対処するための諸政策をまとめた「一括法」を成立させる過程で、カトリック陣営がさらに不安定化していったことが分析される。

第5章「移行期」では、同じCVP/PSCの右派サブ・リーダーであったルフェーブルがエイスケンスに替わって社会党との連立政権を率いるが、これも政治原則を軽視した政権であったことが指摘されている。これゆえにカトリック陣営はさらに動揺して、ルフェーブルを担っていた自由主義カトリック派の党員の多くが65年総選挙に際してCVP/PSCを離れて、自由党に参加することに至る過程、すなわち「終焉」と呼ばれる政党システムの破片化・変移化への過程が実証的に分析されている。つづく第6章「分裂期」では、従来のリーダーたちとは経歴、個性、そして行動において異質な「反エリート」型リーダーとして、ファンデンボイナントが登場した理由が分析される。さらに、彼がルーヴァン大学紛争に対処する際に、「ワンマン的」な手法を多用したことで、カトリック陣営の分裂がさらに大きくなっていく過程が実証的に分析される。

終章にあたる第7章で、著者はそれまでの歴史的分析を踏まえて、次のように理論にもかかわる斬新な指摘をしている。第一に、分析対象にした約10年間において、エリートの「協調的行動」こそが、レイプハルトの主張とはむしろ逆に、列柱構造を不安定化させて、政治構造の変動を招いた。第二に、この時期に「協調的行動」が失敗した主たる原因は、彼らが政権の維持を最重要課題と認識し、その反面、従来から政党が掲げてきた原則を「放棄」したことと、さらには、不満をつのらせていた党内集団に対して、彼らエリートたちが補完的動員を行わなかったこと、に求められる。第三に、この時期の政治的不安定は、たんに列柱構造が不安定化したから必然的に生じたのではなく、リーダーシップの失敗という中間変数が大きく働いていたからこそ生じた。これらが著者の主張の要点であ

る。

本論文は綿密な実証にもとづいて斬新な議論を提起した労作ではあるが、以下のような弱点も審査委員会において指摘された。第1に、「構造よりも主体」が重要だという著者のテーゼに対して、主体は構造に組み込まれているのではないかという反論がなされた。確かに著者は一次資料を用いて政治リーダーたちの政治認識を検証しているが、史料に制約される実証研究という性格もあって、政治リーダーたちの権力維持志向がどこから生じたのかの分析にあまり踏み込んではいない。この意味で構造か主体かという定式化はやや誤解を招くものであり、むしろ列柱かリーダーの行動かと表現したほうがよいであろう。

第2に、著者がカトリック陣営の不安定とか分裂を分析する際に、政党レベルの問題と社会集団レベルの問題をときに分離しないで分析している点が指摘された。列柱という概念は両方のレベルを含むものとしてふつう使われるので、たしかに著者がそれにやや引きずられたという印象を受ける。この点で、「終焉」に関して政党レベルの分裂は分析されているが、カトリック社会集団についての言及があまりなされていないことがやや惜しまれる。

第3に、比較政治理論の側面から、ベルギーにおいて「多極共存型民主主義」は60年代末で終わったのではなく、むしろ形を変えて生き残ったのではないかという反論が提起された。この点については、著者が本論ではレイプハルトによる最初の定式化を重視するあまり、70年代以後の理論の発展と、それをめぐる多様な論争にまで視野があまり届いていなかった面があり、今後の研究を発展させる際のひとつの指針となるであろう。

本論文には以上のような弱点はあるが、これらは論文の学術的価値をいささかも損なうものではない。本論文は日本で始めて書かれた、現代ベルギー政治史の本格的かつ実証的な分析であり、政治史研究だけでなく比較政治学の分野でも大きな学問的貢献をしていると評価できる。通読して強く印象に残ることは、実証分析の背後にある著者の誠実かつ真摯な知的態度であり、これが著者による政治リーダーたちへの批判的姿勢をより強固なものに、分析をより説得力のあるものにしていく。以上のことから、審査委員会は本論文の提出者を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと判断する。